

195

こんにちは。塾長の大井です。

前回のつづきです。

冬期講習は朝から晩まで授業が続く長丁場です。

私たちが小3から小6まで全学年を授業する日もあります。

それでも、合格メダルを書くのが億劫(おっくう)なわけではもちろんありません。むしろ早く子どもたちにメダルを贈って、彼らの合格への動力にしてやりたいと思っています。

ただ、冬期講習前半の彼らを見ていたら、そのタイミングでメダルを贈ることにどうしようもなく違和感を覚えたのです。

田宮が言いました。

「今日、あの子たちにメダルに書くメッセージを考えていたんだけど、なんか出てこないんだよな……。書けなくはないけどさ、ひねり出して書くのも嫌なんだよね。」

合格メダルは、文言を記せば即完成というものではありません。

絶対に受からせたい。何としても受かりたい。

何年分もの師弟の想いが重なり合って、ありったけの熱が湧いて、自然にふさわしいメッセージが降ってくるものです。

その時の彼らには、それだけの想いが感じられなかった。それは図らずも2人ともが等しく抱いた感覚でした。

「いいよ。多分今じゃない。延期しよう。」

私もそう言いました。

式の開催を首を長くして待っていた子どもたちに、式の延期を告げました。

「今はまだ贈れないと思った。

メダルも合格も誰かに貰うものじゃない。君たち自身で勝ちとれ。

あげられない先生たちの悔しさをちゃんと受け止めてほしい。」

そう言うと、浮き浮きと高揚していた彼らは、神妙な面持ちになりました。それでも、まっすぐこちらを見て何度もうなずいていました。彼らの目はずっと足りなかった覚悟を示そういう表情に映りました。

そうして、TOP 史上初めてメダルの無い年越しを迎えました。

少しほろ苦く、でもきっと必要な悔しさでした。

年が明け、冬期講習の最終日、延期していたメダル授与式を行いました。

その頃にはもう、私たちにも自然にメッセージが降って来ました。

1人ずつ顔を思い浮かべながら書いたメッセージを読み上げ、1人ずつ首に掛けていきました。

みんな泣いていました。後ろで見ている5年生までも泣いていました。

そして大事そうに、うれしそうに、何度も何度も私たちのメッセージを読み返していました。

合格メダルは師弟の全てです。どの学年もとても嬉しそうに受け取ります。でも、こんなにも喜んで、こんなにも涙した学年は初めてでした。

(絶対受からせる。)

私も激しく込み上げるものを感じながら、胸に誓いました。

甘えんぼで、おっちょこちょいで、底抜けに明るくて、不器用で。

それでもなぜか、胸を焦がさずにはられない。

5期生とは、いつもそんなクラスでした。

その後も、今日まで注げる全てを注いできました。

明日、5期生が夢の舞台に上がります。

いざ、夢を叶えに。

TOP 生の誇りと、合格メダルを掲げて。

2019年1月31日

大井雄之